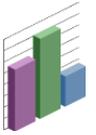




このガイドでは、Oracle Business Intelligence をご使用の環境に適合させるために、よく変更されるデフォルトの構成設定を修正する方法を説明します。

これらおよびその他のタスクの詳細は、Oracle Technology Network の [Oracle BI EE ドキュメント](#) を参照してください。



## リポジトリをアップロードし、Oracle BI プレゼンテーション・カタログの場所を設定する理由

管理者は、ユーザーがメタデータ・リポジトリと、必要な情報が格納されている Oracle BI プレゼンテーション・カタログにアクセスできるようにする必要があります。リポジトリのアップロードとカタログの場所の設定の重要性を、次に示します。

- **リポジトリのアップロード**— Oracle BI サーバーが起動時にリポジトリをメモリーにロードして、問合せでリポジトリを使用できるようにします。

リポジトリ・ファイルをアップロードする場合は、リポジトリ・ファイルの名前と場所、および現在のリポジトリ・パスワードを入力します。アップロードされたリポジトリは、Oracle BI サーバーのクライアントが使用できます。

リポジトリは、バイナリ(RPD)形式でのみアップロードできます。MDS XML リポジトリはアップロードできません。

RPD 公開ディレクトリを指定して、オンラインのリポジトリ変更がクラスタ内に伝播されるようにできます。オンライン変更が行われた場合は、マスター BI サーバーがそのローカル・リポジトリをこのディレクトリにコピーします。スレーブ BI サーバーが起動したときに、公開ディレクトリのバージョンが新しくなっている場合は、各スレーブ・サーバーが共有ディレクトリのバージョンをそのローカル・ディスクにコピーします。

Oracle BI サーバーの各インスタンスは、デフォルトのローカル・ディレクトリからリポジトリをロードすることに注意してください。Fusion Middleware Control でアップロードされたリポジトリは、デフォルトの各ローカル・ディレクトリにアップロードされます。

- **Oracle BI プレゼンテーション・カタログの場所の設定**— Oracle Business Intelligence のユーザーがカタログ・オブジェクトを使用できるようにします。カタログがアップロードされることはありません。かわりに、カタログ・ファイルを手動でローカルまたは共有の場所にコピーして、その場所を Fusion Middleware Control で設定します。

各プレゼンテーション・サービス・コンポーネントは、Fusion Middleware Control で指定されるカタログの場所から Oracle BI プレゼンテーション・カタログをロードします。次の指定が可能です。

- 共有の場所を指定した場合、カタログへの変更をすべてのプレゼンテーション・サービス・コンポーネントでアクセスできます。
- ローカル・ディレクトリを指定してローカル・カタログに変更を加えた場合、その変更をすべてのコンポーネントに伝播させる必要があります。

## アップロードされたリポジトリに割り当てられたバージョン番号について

リポジトリをアップロードする際には、各 Oracle BI サーバー・コンポーネントのローカル・リポジトリ・ディレクトリにコピーされます。このディレクトリは、次の場所にあります。

`ORACLE_INSTANCE\bifoundation\OracleBIServerComponent\coreapplication_obisn\repository`

リポジトリがアップロードされた後には、バージョン番号を示す接尾辞が付けられます(例: SampleApp\_bi001.rpd)。このバージョン番号は、リポジトリがアップロードされるたびに増分します。この番号付けによって、以前のバージョンが上書きされません。以前のバージョンに戻すには、使用するリポジトリの特定のバージョンを再アップロードする必要があります。

リポジトリ・ディレクトリまたは共有ネットワーク・ディレクトリから以前のバージョンを削除することで、ディスク領域を再利用できるようになります。

# Fusion Middleware Control を使用したリポジトリのアップロード、および Oracle BI プレゼンテーション・カタログの場所の設定

1. Fusion Middleware Control を起動して、Business Intelligence の「概要」ページに移動します。
2. 「デプロイメント」ページの「リポジトリ」タブを表示します。  
このタブでは、現在アップロードされているリポジトリ (デフォルト RPD と呼ばれる) の名前を表示できます。Fusion Middleware Control でアップロードされたリポジトリの場合、Oracle BI サーバー・クライアントに対して表示されるデータソース名(DSN)は、常に **Star** であることに注意してください。
3. 「構成をロックして編集」をクリックします。
4. リポジトリ公開ディレクトリを指定し、オンラインの RPD 変更をクラスター内に伝播させるには、「リポジトリの共有」を選択し、「RPD 公開ディレクトリ」を指定します。
5. リポジトリをアップロードし、Oracle BI プレゼンテーション・カタログの場所を設定するには、次のオプションを完了します。
  - リポジトリ・ファイル
  - リポジトリ・パスワード
  - カタログの場所
6. 「適用」、「変更のアクティブ化」の順にクリックします。
7. Business Intelligence の「概要」ページに戻り、「再起動」をクリックします。

Oracle Business Intelligence はデフォルトで、**SampleAppLite.rpd** という名前のサンプルのデフォルト・リポジトリで構成されます。

Overview Availability Capacity Management Diagnostics Security **Deployment**

Presentation **Repository** Scheduler Marketing Mail

### BI Server Repository

This section shows the current installed RPD. You can use this section to configure a shared RPD location. Apply

Default RPD SampleAppLite\_BI0001  
 Share Repository  
RPD Publishing Directory

#### Upload BI Server Repository

Use this section to upload a new RPD and its password to your BI Server domain. You may also use this section to re-enter the password if a mistake was made on a previous upload.

Repository File Browse...  
Repository Password   
Confirm Password

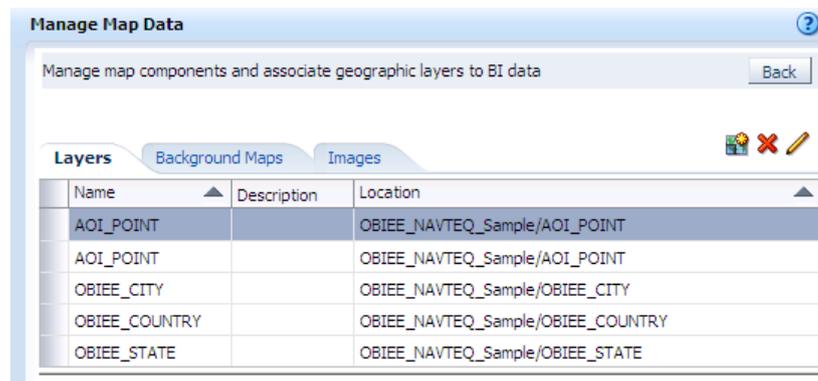
#### BI Presentation Catalog

This section shows the current location of the catalog used by Presentation Services. Use this section to change the location of the catalog, or to share the catalog by pointing to a shared location.

Catalog Location \$ORACLE\_INSTANCE/bifoundation/OradeBIPresentationServicesComponent/\$COMPONENT\_NAME/catalog/SampleAppLite

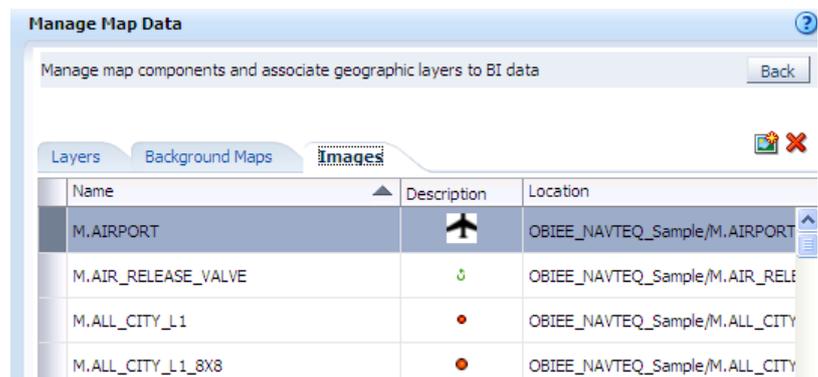
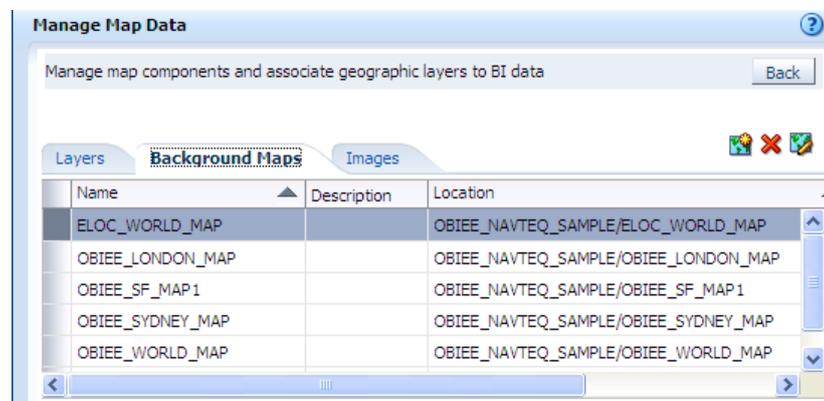
## 管理ページを使用したマップの管理

- Oracle BI Enterprise Edition にサイン・インします。  
管理およびマップ・データ管理の権限へのアクセス権が付与されていることを確認します。
- グローバル・ヘッダーで、「管理」をクリックします。「管理」ページが表示されます。
- 「マップ・データの管理」リンクをクリックします。「マップ・データの管理」ページが表示されます。



- 「レイヤー」タブをクリックします。
- 「レイヤーのインポート」ボタンをクリックします。「レイヤーのインポート」ダイアログが表示されます。
- ズーム操作およびドリル操作に必要な接続およびレイヤーを選択します(このタブには、「管理」ページでの他の選択は事前移入されません。マップでは任意のレイヤーまたはイメージを使用できます)。作業するサブジェクト・エリアに適したレイヤーの選択を終了したら、「OK」をクリックします。
- 「レイヤー」タブに戻ってレイヤーを選択し、「レイヤーの編集」ボタンをクリックします。「レイヤーの編集」ダイアログが表示されます。ここで、レイヤーを属性列に関連付けて、マップ・ビューにBIデータを表示できるようにします。  
レイヤーの編集を終了したら、「OK」をクリックします。  
このタブを使用してレイヤーをBIデータに関連付けます。複数のサブジェクト・エリアでCity列を使用する場合、各サブジェクト・エリアのレイヤーにCity列を関連付ける必要があります。

- 「背景マップ」タブ、「背景マップのインポート」ボタンの順にクリックします。「背景マップのインポート」ダイアログが表示されます。
- 使用する接続およびメイン・マップを選択します。  
メイン・マップ用の接続には、レイヤーまたはイメージ用とは異なる接続を選択できます。  
メイン・マップの選択を終了したら、「OK」をクリックします。
- 「背景マップ」タブに戻ってマップを選択し、「背景マップの編集」ボタンをクリックします。「背景マップの編集」ダイアログが表示されます。ここで、マップに名前を付け、レイヤーの順序とそれらのズーム・レベルを指定します。  
マップの編集を終了したら、「OK」をクリックします。



- オプションで、「イメージ」タブ、「イメージのインポート」ボタンの順にクリックします。「イメージのインポート」ダイアログが表示されます。マップでイメージをフォーマットとして使用する場合は、イメージをインポートできます。
- 使用する接続およびイメージを選択します。  
イメージの選択を終了したら、「OK」をクリックします。
- 「管理」ページでの作業を終了したら、「戻る」をクリックします。変更が自動的に保存されます。  
背景マップ、レイヤー、ズーム・レベルを指定すると、Map Viewer は、この情報を使用してマップの静的イメージを作成します。このイメージはレンダリングのためにブラウザに送信され、コンテンツ・デザイナーおよびエンド・ユーザーがマップ・ビューで使用できるようになります。

## Fusion Middleware Control を使用したプレゼンテーション設定のデフォルトの変更

1. Fusion Middleware Control を起動して、Business Intelligence の「概要」ページに移動します。
2. 「デプロイメント」ページの「プレゼンテーション」タブを表示します。
3. 「構成をロックして編集」をクリックします。
4. 次のオプションを完了します。
  - ページ・タブの表示
  - セクション見出しの表示
  - ダッシュボードのセクションを閉じられるようにする
  - ピボット・テーブルで自動プレビューを表示
5. 「適用」、「変更のアクティブ化」の順にクリックします。
6. Business Intelligence の「概要」ページに戻り、「再起動」をクリックします。

The screenshot shows the 'Presentation' configuration page in Fusion Middleware Control. The navigation tabs at the top include Overview, Availability, Capacity Management, Diagnostics, Security, and Deployment. Under the 'Presentation' tab, there are sub-tabs for Repository, Scheduler, Marketing, and Mail. The 'Presentation' section is active, showing 'Dashboard Defaults' and 'Analysis Defaults'. In 'Dashboard Defaults', the options are: 'Show page tabs' (unchecked), 'Show section headings' (unchecked), and 'Allow dashboard sections to be collapsible' (checked). In 'Analysis Defaults', the option is: 'Pivot Tables show auto-preview' (checked).

## エージェントに影響する Oracle BI スケジューラの電子メール設定の Fusion Middleware Control を使用した構成

1. Fusion Middleware Control を起動して、Business Intelligence の「概要」ページに移動します。
2. 「デプロイメント」ページの「メール」タブを表示します。
3. 「構成をロックして編集」をクリックします。
4. 「メール」および「Secure Socket Layer(SSL)」領域の各オプションを完了します。
5. 「適用」、「変更のアクティブ化」の順にクリックします。
6. Business Intelligence の「概要」ページに戻り、「再起動」をクリックします。

The screenshot shows the 'Mail' configuration page in Fusion Middleware Control. The navigation tabs at the top include Overview, Availability, Capacity Management, Diagnostics, Security, and Deployment. Under the 'Deployment' tab, there are sub-tabs for Presentation, Repository, Scheduler, Marketing, and Mail. The 'Mail' section is active, showing the 'Mail' configuration page. The page contains the following fields:

- SMTP server: localhost
- Port: 25
- Display name of sender: Oracle Business Intelligence
- Email address of sender: defaultuser@defaultmailserver.com
- Username: (empty)
- Password: (empty)
- Confirm password: (empty)
- Number of retries upon failure: 1
- Maximum recipients (enter zero for no maximum): 0
- Addressing method:  To  Blind Copy Recipient (Bcc)

Below the Mail section is the 'Secure Socket Layer (SSL)' section with the following fields:

- Connection Security: None (dropdown), default port 25
- Specify CA certificate source:  Directory  File
- CA certificate directory: (empty)
- CA certificate file: (empty)
- SSL certificate verification depth: 9
- SSL cipher list: (empty)